15）中国陶磁器産業の動向調査報告

寺﨑　信

佐賀県は県内産品の中国市場戦略を進めているが、陶磁器産業も国内市場が低迷する中、海外進出の機運が高まりつつあり、これを技術的な面から支援するため、陶磁器産業の動向を調べた。中国市場への参入は難しいものがあるが、高級陶磁器は市場獲得の機会があり、材料や製造技術を高める取り組みが必要である。

1. はじめに

佐賀県は農産物などの県内産品を中国へ輸出するため瀋陽、香港、上海に海外拠点を設置し、輸出産業の支援を始めた。有田焼なども国内の陶磁器市場が衰退する中、海外、とりわけ中国市場に注目し、展示・販売など海外進出が試みられている。しかし、十分な成果を出すにいたっていない。原因としてはいくつかあるが、海外展開のマーケティング戦略には技術に関する検討が十分になされているとは言えず、技術的な支援が当センターの検討課題であると考えている。今回、有田町の中国訪問団に同行し、景徳鎮陶磁器の動向調査を実施した。

有田町は、北京での友誼促進会訪問及び景徳鎮での国際陶磁博覧会・世界陶磁器市長サミット出席、さらに有田館調査などの目的で訪問される。

2. 日程

中国訪問団は、平成 23 年 10 月 16～21 日の期間で北京及び景徳鎮を訪問している。日程と訪問先は表 1 のとおりである。

3. 調査結果

3.1 製陶所について

(1) 法藍陶磁有限公司(FRANZ)

工芸品が主力製品の台湾系の会社で、欧米や日本にもショールームを持っている。この工場は 800 人もいる大工場であった。商品は食器・美術品などで、美術品は独創的な形で派手な彩飾が施されている。ノベルティはマイセン磁器と同等の技術レベルを有していると思われる。価格は安くはないが、中国の製造コストは安く、競争力の

表 1　中国景徳鎮の調査日程

日付	時間	場所	内容	訪問地
10/16 （日）	15:10	福岡→北京	中華国際航空	
10/17 （月）	12:00 13:30 16:25	北京 北京→景徳鎮	中国国際友誼促進会と面談 中国工芸品輸出入総会社訪問 中華国際航空	工芸美術大廈
10/18 （火）	9:00 10:00 13:30 15:30 19:30	景徳鎮	中国景徳鎮国際陶磁博覧会開幕式 博覧会展示視察 視察2ヶ所 景徳鎮副市長と面談 公式演奏会	古窯民族博覧区 法藍陶磁有限公司 財富大廈
10/19 （水）	9:00 14:00	景徳鎮	第1回世界陶磁器市長サミット 視察5ヵ所	景徳鎮仏芸陶磁館 雲一工房 高氏薄胎大皇 景徳鎮陶磁股份(有) 佳洋陶磁有限公司
10/20 （木）	9:00 10:00 21:20	景徳鎮 景徳鎮→上海	有田館訪問 視察3ヶ所 深川航空	景徳鎮陶磁学院 浮梁古県衛 陶磁器市場街
10/21 （金）	11:55	上海→福岡	中華国際航空	

高い製品を出せると思われる。

(2) 景徳鎮仏芸陶磁館

寺院の磁器製作・展示館であり、仏具磁器製品を作っている。絵付け職人の繊細な線描きが見事である。景徳鎮では日本に比べ、線描きの細さが高い評価を得るようである。また、6m 以上はある磁器製の七重の塔もあるが、これも中国ならではのスケールである。幾つかに分けて接いだものであるが、同様なものは日本では見られない。繊細なものから大物まで多彩な技術を有している。

(3) 雲一工房

仏芸陶磁館で創作活動をされている雲一氏の工房を訪問した。小さな工房で職人が 2 人いるだけだが、急須の接着加工や下絵付け線描きの繊細さは高いレベルである。訪問する先々でレベルの高い手作り、手描きを見せられ、このような小さな工房でも見せられ、有田焼の特徴や技術など敵わないものを感じた。ここで作っている急須はふたの密閉性が高く、空気穴をふさぐと零れないと自慢されていた。この工房は成形技術も緻密な技術であった。

(4) 高氏薄胎大皇

薄胎素地の工場である。ろくろ成形ではなく、鋳込み成形であった。30cm の碗を削っていたが、厚さを 1mm 以下のレベルに削り込み、焼き上がりをさらに薄くするようである。削る技術もここまでくると見事である。1mの碗用の型もあり、焼き上がりの厚さも 1mm 程度に抑えるとのことであった。施釉もさらさらの釉薬を表と裏に掛き分けていた。薄胎素地は簡単に真似できない技術であると感じた。

また、120cm 高×30cm 角の磁器製置物を製作されていた。この大きさで反りがなく、平滑に作られている。継ぎ目も見えず、見事な出来栄えである。乾燥に木枠を使った特別なやり方をしているようである。

さらに、1×2m の陶板を見せていただいたが、表には絵付けがされ、裏には漢文が書かれた両面施釉陶板である。この大きさで、どのようにして焼成したのか考えが及ばない。

今回の景徳鎮調査ではこの工場が最も驚かされた。第一に大切なのは、焼腰の強い陶土であると考えられる。さらには、成形技術、乾燥技術、焼成技術である。最も基本的な製造技術が、最も重要だと認識された。有田にはない陶土、有田にはない技術も見ることができた。同じものを作るには相当の努力と時間が必要だと感じた。

(5) 景徳鎮陶磁股份有限公司

中国日用陶磁器の売り上げトップ 100 社に景徳鎮からは 1 社も入らないが、この製陶所は景徳鎮では最大である。元国営工場だが、民営化され洋食器や高級品ブランドを作っている。工場は見せてもらえなかったが、ローラーハースキルンなど最新の設備を導入しているようである。中国では、1 企業が複数のブランドを生産している場合があり、ここも 3 種類のブランドを有している。大量生産のブランド「家好」は、洋食器や中華食器セットが作られている。

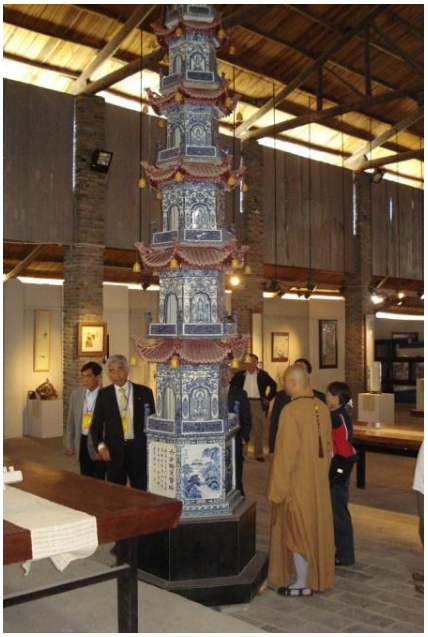

図 1 寺院では仏具磁器製品を作っている. これは磁器製の七重の塔であるが, 中国ならではの製作物である.

図 2 高氏薄胎大皇の素地工場. 鋳込み型であるが, かなり大きな薄胎素地を作っている.

セットものの国内需要は高く、全国から注文が来るとのことである。「金品陶」は芸術品用のブランドであり、手作り、手描きの製品が見られた。

また、珍しいカップがあったが、それは表裏に絵付けがなく、内部に絵付けされていた。素地の透光性も高く、内部の絵付けが透けて見える磁器である。これもまた、日本では見かけない高い技術である。この製作には透光性の陶土だけでなく、接着、イングレーズなどの高度な技術が要求されると思われる。

(6) 佳洋陶磁有限公司

手作りで宋・元・明・清各時代の伝統工芸製品を作ることを特徴としており、手作り、手描きで製作されている。2 階は絵付け室になっていたが、ここでも素晴らしい絵付けが見られた。大花瓶に描きこんでいる下絵付けも 2 日ほどで済ませるらしく、手際が驚くほど速い。工場内には分業と徒弟制度があるようで、若い職人が先輩職人の技術を学んでいた。伝統工芸を保存するため、人材育成も行われていた。

3.2 陶磁器関連機関などについて

(1) 中国工芸品輸出入総会社

北京にある陶磁器の輸出入の商社で、11 月に開催される JAPAN ブランド事業北京展示会会場である。李沢民副社長から進捗状況などの説明を受けた。中国は陶磁器の生産大国でもあるが、消費大国でもある。有田焼の日用品は難しいが、高級美術品、とりわけブランド力があれば市場を獲得できると説明された。また、PR だけでなく、在中国日本大使館大使などが関われば、党書記からも相応の方が出席することになり、多くの企業や富裕者の集客につながる。国際陶磁博覧会の矢島親善大使は、新聞・雑誌・テレビでの PR、展示会での入賞暦、人間国宝などのブランド、北京精華大学教授とのコネクションなどが大切で、できれば佐賀県による外交ルートへの働きかけなどを説明された。ここの視察をとおして、輸出入製品の技術レベルと中国展開のノウハウを知ることができた。

(2) 景徳鎮市の取り組み

景徳鎮市は、第 1 回世界陶磁器市長サミットを開催したが、人民政府の支援により国家的事業として行われている。世界 11 カ国から 15 団体が参加している。日本からは友好交流を行っている有田町と瀬戸市、経済交流がある加賀市が招待を受けている。サミットでは、今後、文化・経済・学術交流などに取り組む共同宣言が採択された。

景徳鎮市の取り組みは陶磁器産業だけでなく、ハイテク産業、文化、観光などの分野へ総合的な開発が進められており、街の街燈や公園池の巨大な磁器製オブジェなど街づくりも陶磁器産業を特徴づけるものになっている。景徳鎮は中国にあってはすでに大きな産地ではないが、新たな有り様が進められている。陶磁器の構造的不況に直面している有田も参考にできるところである。

(3) 2011 中国景徳鎮国際陶磁博覧会

2004 年から始まり 8 回目を迎える大規模な展示会である。会場の陶磁博物館は 5 階からなり、300 ブースが出展している。東側の丘にも大テントが設営され、250 社が展示している。展示品は、土ものから磁器まで様々なものが

図 3 景徳鎮陶磁股份有限公司のカップは表裏に絵付けはなく，内部に絵付けされている．素地の透光性も良く，透けて見える．

図 4 26 万枚のタイルで作られた龍のやきもの．34 長×13.8 高 m で最大級．景徳鎮の威信をかけた製作物である．

あるが、日本でも見られるタイプが多く、有田焼などが出展しても遜色ないと感じた。ただ、磁器製掛け軸やインテリア照明など中国ならではのものが見られた。

中国展開をしている有田焼陶芸家のグループが東洋銘磁館というブースで出展されていた。白磁よりも辰砂釉の彩飾が中国人の嗜好に合うようである。有田焼の中国展開では最も先行している事例であり、成功を期待したい。九谷焼から商社が派手な彩飾の商品を展示していた。価格は日本よりも高いが、成果を出されている。第 1 回から参加されており、継続的な取り組みが実績となっているようである。また、九谷焼作家中村元風氏のブースがあった。同氏も 2004 年に出展以来、継続的に中国で活動をされている。上海の作品展での入賞など中国での実績を積み、知名度を上げられている。同氏の有名な作品も朱色系のものであり、釉彩が成功の秘訣と考えられる。同氏のこれまでの取り組みは、模範とするべき成功事例と考えられる。

(4) 古窯民族博覧区

成形から焼成までの伝統技法を保存・伝承している。ろくろ職人も絵付け職人も高い技術である。ここの薪窯は世界最大であり、ギネスに登録されている。今も使われており、天井までサヤ詰めによる窯積み中であった。
また、150cm はある結晶釉の大壷が展示されていた。全面に大きさのそろった亜鉛結晶ができており、日本では見られないスケールである。大窯だけでなく、製作技術があってできる加飾だと思われる。

有田には磁器製太鼓があるが、ここでは磁器製の打楽器に加え弦楽器もあり、女性演奏隊による稽古が行われていた。楽器には磁器の良さを出した加飾がされている。イベントなどで演奏をされているようで、すばらしい観光資源である。

(5) 景徳鎮陶磁学院

景徳鎮市外事弁公室の馮志紅科長と景徳鎮陶磁学院客員教授の二十歩先生に案内いただいた。この大学は市内の校舎と郊外の新校舎があるが、文学部、経済学部、法律学部、工学部などがあり、学生が 4 万人もいる総合大学である。陶磁器学科には全国から学生が集まり、毎年、多くの学生が卒業していくわけで、陶磁器産業の人材育成に寄与している。

郊外の長閑な三宝村に留学生用の研修所がある。この日は 2 年生の実習が細工室で行われており、20 人くらいが手びねりをしていた。学生に進路希望を聞いたところ、陶芸を目指したいとのことである。しかし、陶芸で身を立てられる人は少なく、多くは企業に就職するとのことである。敷地内では陶石を石臼で突いて、水ひして陶土にしていた。有田焼と同じ作り方であり、共感を覚えた。

(6)人民広場周辺の陶磁器市場街

一年中陶器市が行われており、きれいなショールームの通りもあれば、木造小屋作りの未舗装の通りもあった。市場は広さもあれば、奥も深く、並べられている商品も多彩で、1 時間程度では見られるものではない。路上にも壷やテーブルが並べられており、まさしく、大量の陶磁器で

図 5 博覧会の会場。陶磁器製の掛け軸などが出展されている.
大きさは 40×160cm 程度の大判もみられた.

図 6 景徳鎮陶磁学院の研修所にある製土場. 有田焼と同じく,
陶石を石臼で突いて, 水ひして陶土を作っていた.

ある。アクセサリー、照明具、薄胎素地、青花ペンなど日本では見られない珍しいものもあり、価格もいろいろである。バスセンターのそばにも大きな陶磁器市場街があり、この町のやきもの供給は計り知れないものを感じた。

3.3 考察

佐賀県は海外市場戦略を進めているが、農産物を中心に中国進出が動き始めている。陶磁器産業も海外進出の機運が高まっており、この 1 年間でも以下に示すような活動や講演会が実施されている。

①有田ニューセラミックス講演会

平成 23 年 8 月 10 日

「中国陶磁器産業の現状と有田焼の中国でのビジネスチャンス」 二十歩景徳鎮陶磁学院客員教授

景徳鎮の活発な陶磁器産業を紹介し、日本にもチャンスがあることを伝えられた。

②ジェトロ中国陶磁器セミナー

平成 23 年 9 月 5 日

「中国市場へ日本の陶磁器を売り込むにあたって」 高野ジェトロ上海コーディネーター

税金や商談など中国商流というものを紹介された。

③国際理解研修

平成 23 年 12 月 19 日

「中国との交流にあたって大切にしたいこと」 モーバンフ氏（上海出身ジャーナリスト）

沿海部よりも今後発展の見込める内陸部への進出にビジネスチャンスがあること、また、佐賀県で可能性のある物産はやきものであることを直言された。

④キーパーソン有田ステージ

平成 24 年 3 月 5 日

「有田焼の世界ブランド確立プロジェクト」山口有田 JAPAN ブランド実行委員会委員長

有田焼関連機関・企業で取り組んだ北京展示会の報告である。集客や販売額で一定の成果を出せたが、学んだことを今後どう生かすかとのことである。

また、調査資料としてはジェトロにより「中国における陶磁器製品の市場動向調査」が発行されている。中国の輸入陶磁器の額は中国国内市場の 0.4%にすぎないが、輸入に占める日本の割合は 20%と多く、日本陶磁器は人気がある。今後も伸びる傾向が見られ、ビジネスチャンスもあるようだ。

これらのことから、中国で有田焼は認知されているわけではなく、短期間の取り組みで成果を出すのは難しい。ブランド確立をもくろみながら現地での長期間の取り組みの中で市場を開拓する考えが必要である。知名度を上げるためにも国内市場とりわけ首都圏での販売活動が重要と考えられる。このような取り組みを進める中で、製品に付加価値をつけることが重要である。

製品開発には焼腰の強い陶土、複雑な形状の製造技術、新たな顔料による加飾技術などが重要と考えられ、技術ニーズに応えていくことが製陶所や当センターの役割と考えられる。

図 7 陶磁器市場街. 壷やらテーブルやら路上にも並べられている. やはり, 中国では朱色が好まれる.

図 8 景徳鎮訪問でお世話頂いた景徳鎮市外事弁公室の方々と有田町訪問団一行.

4. まとめ

(1) 景徳鎮の陶磁器産業は非常に活気があり、製品の種類や量も実に多く、企業や就業者も多い。現況は、国内需要や高級品の輸出に重点があり、日本陶磁器に対する関心は低い。

(2) 他方、日本の陶磁器が中国進出で成功している事例が、陶芸陶磁器に見られるが、富裕層を対象に中国市場を獲得できるのではないかと考えられる。しかし、日用陶磁器は中国人の嗜好に合わず、コストの面からも参入するのは厳しいと考えられる。

(3) 中国の沿海部は内陸部に比べ、今後の発展は小さい見通しであるが、富裕層が多く期待できる。特に、中国在住の日本人、日系百貨店、日系料理店などは和食器を嗜好しており、市場獲得のチャンスがあると考えられる。日本と関係の深い瀋陽や香港、日本製輸入陶磁器の大消費地である上海は佐賀県の中国拠点があり、これらの地域の動向を掴むことが大切である。

(4) 景徳鎮では日本にはない独特の製品やそれを裏付ける技法・技術を確認できた。それは有田焼にはない陶土及び製造技術によるものである。長期的にでも景徳鎮の高度な技術と肩を並べられれば、将来、新商品の開発に繋がり、国内外への展開も新たに生まれると期待できる。そのためには、陶土・釉薬・顔料などの素材技術や成形・加工などの製作技術や加飾技術などへの取り組みが重要である。

謝辞

本調査を進めるにあたり、景徳鎮陶磁学院の二十歩客員教授にご助言を頂きましたことに厚くお礼申し上げます。また、有田ニューセラミックス研究会の西山泰雄会長及び筒井孝司事務局長からご協力を受けましたことに深く感謝いたします。また、景徳鎮の調査にあたり、有田町の田代正昭町長に中国訪問の機会を頂きましたことに厚くお礼申し上げます。

参考文献

1) ジェトロ，中国における陶磁器製品の市場動向調査，1-43 (2009).
2) ジェトロ，ジェトロ中国陶磁器セミナー(資料)，1-12 (2011).
3) 九州経済産業局，キーパーソン有田ステージ(資料)，1-58 (2012).
4) 景徳鎮市外事弁公室，2011 世界陶磁城市市長峰会(HANDBOOK)，1-39 (2011).
5) 2011 中国景徳鎮国際陶磁博覧会組委会，会刊，1-108 (2011).